

因声求義における段玉裁と王念孫・王引之の位相

濱 口 富 士 雄

一

近年、羅憲華「『祝』字為何有『斷』義」(『四川大學學報叢刊』二二二輯「漢語論叢」二六三)と題した、わずか一頁の割記のような論文が出た。これは王念孫『讀書雜誌』に採用されている、子の王引之の『荀子』勸学篇に対する因声求義による考拠を問題としたものである。王引之の論は、「強自取柱、柔自取束」の「柱」が、「祝」字と音近で通用し、しかも『広雅』に「祝、断也」とあり、さらに異文として『大戴礼』勸学篇に「強自取折」とあるので、結局「柱」は「断」義として解釈される、というものである。これに対して著者は、「柱」が「祝」字と通用するのは認められるが、「柱」「祝」に「断」義があるについては、いづれに対しても仮借義であるから、その本字が示されなければ納得できない、と執筆動機を明かにした。

しかし、この動機そのものが問題なのである。王氏父子の考拠は、いわゆる漢字自体の字義を考拠の視野に入れず、漢字によって書記された古代漢語そのものが対象とされていた。したがって文脈上、「断」義を担う語が、「柱」「祝」を語形として書記されていた事実の確定をもつて考拠を完結させたのであって、本字への志向はない。これは章炳麟がすでに指弾し、黄侃によって不十分ながら弁明されている⁽¹⁾。著者が展開した本字究明の考拠は、段玉裁に連なる立場ではあるが、王

氏父子がまさに克服しようとしたものであった。ところで本字について次のように推定する。すなわち「柱」(定母侯部)「祝」(章母覺部)の両仮借字の本字は、斧を本義とする『説文』の「斲」(章母屋部)であり、その引伸義として「断」義は十分成立する。さらに「柱」と「斲」とは定母・章母で舌音どうしの双声であり、侯部・屋部は陰入対転、「祝」と「斲」も双声でしかも覺部・屋部は入声どうしで通じる、と音韻面からも確認する。——こうした作業に、段玉裁と王氏父子の経書解釈に対する、ことにそれに投影される経書の書記に対するそれぞれの観点への不明を見る思いがある。

二

清代考拠学が訓詁の主要な手続きとしていた因声求義は、古音分部を根柢にして確立された方法論である。言語の本質は、音声に存するという認識に基づいて、経書の表現を、それが記述された時代の音声としての言語に還元し、テキストの仮借ないしは非規範的な漢字使用による文字の障壁を突き抜けて古代の語に直接アプローチしようとする営為なのである。

戴震は「論韻書中字義答秦尚書蕙田」の中で「一般的に古代の訓詁で伝承を失っているものは、その音に因って意味を知りうる(可因声而知義)のである」と、まず基礎づけた。これを承けて、段玉裁も「経韵

『樓集』巻一二の顧広圻への書で「詁訓の法としては、古音から古義を得ることができるのである(詁訓之法、由古音可得古義)」といい、また「広雅疏証序」では「聖人が漢字を造字した際には、意味があつてからそこに音が生れ、音があつてからそこに形が生まれた。学ぶ者が漢字を研究する場合は、形体に因つてその音を得、音に因つてその意味を得るのである(因形以得其音、因音以得其義)。経書解釈では意味を得るより大事なことはなく、意味を得るには音を得るより切実なことはい」という。「因音以得其義」これはまさに研究者が、文字を理解する場合のプロセスであり、その延長として経書解釈上の理念が提示された。さらに王念孫は「広雅疏証」の自序で「詁訓の本質は、声音を根拠にする(詁訓之旨、本於声音)。故に声同字異、声近義同があつて、あれこれ同類になつたり区分されたりするけれども、その実態は条理が通つているのである。……ところで今は古音に即して古義を追求し、その間古音から応用や類推をして、漢字の形体に拘束されることはない(就古音以求古義、引伸触類、不限形体)」と説明した。このように段・王は経書解釈における因声求義の枠組みを共有しながら乾嘉期の考拠学の隆盛を築きあげた。しかしその内部にはかなり大きな観点の違いが存在しているのである⁽²⁾。

この因声求義は、音声と意味との相関性を手掛かりとして古代文献を解読してゆく詁訓の基本的な分析で、これを成立させるための言語上の条件は、古代漢語において見出された音近義通という原則である。この音近義通は、すでに経書の成立とともに明確に自覚され、それに基づく語の定義や説明は、『公羊伝』の問答を初めとして経書の記述に散見する。さらに西漢の經今文学における神秘説にあつてもこれは大いに利用され、いわゆる漢代詁訓学における「声訓」は古代漢語の貴重な資料であり、『釈名』はその結集された成果でもある。そして宋代に「右文説」が出されて、諧声文字に対する音義説的な認識が確立し、清代に至るわけである。清代考拠学における古音分部の研究によって古音の各韻部間の構造が次第に明かにされてきた結果、転音の仕組

みや音韻変化の筋道などが、音韻法則として了解されるようになり、古代文献のさまざまな詁訓問題が合理的に解釈され、音義関係もこの古音研究の成果を踏まえて、経験的にではなく、理論的に認識されるようになった。

段玉裁は、『説文解字注』「禎」字項に「声と義とは同源である。故に諧声字の偏や旁は字義そのものと意味が近いことが多い(声与義同源、故諧声之偏旁多与字義相近)」と同じ声符には同義が多いと見て、音と義とが相即不可分の同源であることを明確に認識していた。しかしここでの言明は『説文』に対するものという制約から、いわば右文説の延長線上にあるのかとく、かれの音義説の本質は、諧声系列が中心にあり、諧声字の声符の形体に桎梏されていたといわざるをえない。

王引之は王念孫の見解を継承しつつ『経義述聞』巻二三で「詁訓の本質というものは、声音に存するのであつて、文字に存するのではない(夫詁訓之要、在声音、不在文字)。音声が同じとか近いものは、その意味が大抵近似しているのである」と、音近義通説について明確に指摘する。詁訓の本質が、漢字それ自体にあるのではなく、それが負荷する音声にあるという王氏父子の音近義通の認識は、乾嘉期の考拠学を基礎づけた。しかもかれらの場合、音声は、段玉裁のように声符の形体に捉われることなく、言語レベルで、音声＝意味という認識があつたと考えられる。

ところで因声求義を支える経験則は、古来からの声訓であり、音近義通説であつたが、そのまま無条件で受け入れられる説なのであろうか。言語において音・義の関係には自然的な有契性はなく、社会的な慣習による契約によるとされる。これは語音と意味との間に自然的契機があるならば、異なる言語体系は存在しえないという事実からも自明である。ところが一たび音・義の慣用が固定すると、ある言語体系の中で音義関係はおのずから言語の制度として必然的なものと意識されるようになり、その音義の結合を起源とする語の派生が起こる。ここに音声と意味との間は慣習的・社会的な必然性が成立し、音近義通

の可能性⁽³⁾がある。古代漢語は、ごく一部の連綿語を除くと単音節語であり、しかもこの音節数には限界があるので、同音ないしは音韻変化で転音した近似音節語が広範囲に存在することになる。その中に、ある音義関係から派生した同源語関係にある語もかなり存在する。王力は『同源字典』の巻首の「同源字論」で「およそ音・義がともに近いとか、音が近くて意味が同じとか、あるいは意味が近くて音が同じ字は、同源字という。……同源字は必然的に同義語であり、あるいは意味の同じ語なのである。しかしわれわれは、一般に同義語はすべて同源字である、と逆に言うことはできないのである」という。ここに音近義通説が成立する条件が明かにされた。つまり同源語の関係にある語どうしであることが確認されなければ、音近義通はその成立要件を満たさない。ただ音節の音価が同じか近似しているという条件が整ったとしても、それは同音異語にしか過ぎないのである。要するに、音近義通説は、その前提として同源語という条件を無視しては成立しない、条件づきの原則なのである。

この因声求義は、考拠学を支える訓詁の主要な方法論であったので、その批判もそこに焦点が絞られた。王力は、考拠学の方法論における最も重大な形而上的な誤りは「因声求義」に表われているという。王念孫の「就古音以求古義、引伸触類、不限形体」は合理的であると承認するが、これも度を過ぎて「声近義通」に行き着けば問題があるとする。そして「声近義通は、ただ可能性であり、必然ではない。言語に社会性があるだけではなく、文字にも社会性がある。字形の束縛を取り払うことは正しいが、文字の社会性を否定するのは誤りである」といい、王念孫にその片鱗があり、後人がさらに「声近義通」を強調して、主観的臆断を恣いままにしたと判断する。そして清儒のこの因声求義という考拠学の方法論は胡適らに継承されて、プラグマティズムの防空壕となったとする。この論については、この王力の論調をその発表時の時代環境のなかに戻してみると、五〇年代の、マルクス主義確立のためのイデオロギー論争のなかで展開した中国思想界の胡

適批判の一環であったという歴史的なものであることは明白であり、そのまま受け入れることはできないが、その批判には確かに肯綮に中たるものがある。確かに同源と単なる仮借とを混同し、単なる仮借を同源語にすり替えて声近義通を恣意的に運用することがあった。それは陳澧が『東塾讀書記』巻一で「声は意に象どる」といって、音声と意味と関係を自然的な必然性において捉えたり、章炳麟が「牛と言えば牛なのであり、馬と言えば馬なのである」⁽⁵⁾と音義の絶対的な結合を主張したりする認識がその傾向を促したのである。これは牛の概念は自分の意識内では牛という音と同一であるといったパンヴェニストと同じく、⁽⁶⁾特定言語内における音と意味との社会的慣習的な必然性を、自然的契機による結合と誤ったもので、王力は、本来条件づきであった音近義通の原則を、無条件的な原則にすり替え、声近だけを根拠にして実に恣意的に運用していた事実を批判したのである。ところで語の音義関係は恣意的―非自然的であるからこそ、異音同義語が存在し、かつ同音異義語が存在しうるのである。表記上、仮借が存在するものも、同音異義語の語形を流用するからであり、音と意義とが自然的必然性のもとにあったならば、同音異義語の存在は考えられないはずである。したがって陳澧らに萌す考拠学における音近義通説の主観的な変容は、こうした古代漢語における現実に故意に目をつぶって、音と義との関係に自然的必然性を押し付けた、王力のいう形而上学の導入なのであった。しかしながら少なくとも乾嘉期の段玉裁・王念孫らまでは、音近義通説に慎重に対応し、古注や異文など文献上の証拠を十分用意したうえで同音同義か、単なる音通かをその考拠において区分しながら因声求義を展開したように、ある程度の節度をもって古典解釈に適用していたといえる。

三

因声求義が要請された背景には、古代文献である経書の記述に漢字

の非規範的な用法である仮借が広く行われていたという現実があった。

段玉裁は「説文解字叙」の「仮借」に注して「本義が明かとなれば、この字の音を用いて、この字の意味を用いないのは、仮借と認定することができる」というように、仮借は漢字の音声的借用として理解する。また仮借は初め本字のないものであったが、後にはその字のあるものが多くなつたともいうが、これは經典においては仮借が広く行われていたことの認識を示す。『古文尚書撰異』巻一に「字書というものは形体を主として、字形に即してその本義を追求する。経伝の古文では音声の主として、同じ音声に即してその仮借を追求するのである(凡字書以形為主、就字形而得其本義。凡経伝古文以声為主、就同声而得其仮借)。……一般に経書解釈では、本字を究明してその仮借字に差替えてはならないのである」という。

段玉裁は、音声借用の限界と範囲とをその一七分部の杵と双声との杵とで極めて条理あるかたちで理解していた。『六書音均表』の表一で、古文獻の仮借の状況を総括して「仮借は必ずそれを同部のものから採用する」と言明する。ただしここで「必ず」と同部説を強調しはするが、すぐ後では「仮借は同部のものを採用することが多く、異部のものを採用することは少ない。……これが異なる分部間の合韻の理なのである」というように、一七分部の間における転音理論の枠組みの範囲内での異部間の仮借を許容はしているが、あくまでも合韻という音韻規則の範囲にとどまることが示された。これは重要な指摘である。

なぜなら仮借は音が似ているからといって恣意的に行われるわけではなくて、古音の音韻法則に従い、ある程度はその通用の漢字に慣用があり、しかも音理によって合理的に追究しうる対象であると認定したからである。対象がいかなる手段によって分析できる内容を持つかが了解されないかぎり、その有効な方法論は成立しないことを考えれば、これはすでに解明の手段を確保したことを意味するからである。したがって「広雅疏証序」には「仮借について言及しても、古音について

認識がないのであれば、これはまったく文字・音韻・訓詁の小学とは縁のない者なのである」といい、古音研究が仮借という表記上の難問を抱える古代文獻の正確な解読のために必須の条件であるとを理解していた。

王引之は『経義述聞』の序に王念孫の発言を引用する。すなわち「訓詁の本質は、声音に存している。漢字で音が同じであつたり近いものは、経伝では往々にして仮借するのである。したがって経書を解釈する者は、音を手掛かりにその意味を求めるのであり、その仮借の字を見抜いて本字で解読すれば、不明の点がすつきりと解消するのである(訓詁之指、存乎声音。字之声同声近者、経伝往往仮借、学者以声求義、破其仮借之字、而説以本字、則渙然冰釋⁷⁾)とあり、まず経書の書記は、仮借による表音的な用法が普遍的であることを確認する。ここにおいて解釈者のテキストに対する態度は、おのずから「以声求義」と表音面に重点を置いた解釈になつていく。つまり経書解釈を、あたかも古代漢語を口頭において、まさに日常言語と同じく文字を媒介とすることなく、音声言語として耳から直接的に聞いて理解するという、本来の言語形式に擬制するのである。こうした立場には当然ながら、漢字が介在しないから、それが規範的な使用か、仮借的な使用かの問題は存在しない。漢字の表音機能を手掛かりとしながら、その語が置かれている文脈を通して意味を了解していく中で、文脈上の使用義が明らかとなることから、その漢字が造字時に賦与されたいわゆる本義が仮借かも了解されることになる。仮借であれば、その漢字の字義に左右されることなくその音が指示する文脈上の意味を表すであろう本来的な文字を意識しつつ、語としての意味の了解をもつて解釈の最終的な確定になると考えている。

ところで仮借をいうことは、同音異義語の存在について認識していることである。さらに経書の表記の問題に限定すれば、いわゆる同源通用の漢字も仮借という範疇に包括されると理解する必要がある。仮借は、文獻に出現する書記の様態に関して漢字の表意側面を重視した

規範的立場から判断したものである。その内容は、同音借用―同音異義語、同源通用―同音同義語という具合に差異があるが、規範的な立場からの書記の価値としては、どちらの場合も同音の別字をその表音的側面のみを利用して変りに変りはないのである。すなわちどちらも文脈に即した意味を表す「本字」ではないのである。しかしこれは書記という立場からの見方であって、ひとたび所与の文献をその文脈に即して解釈する立場に視点を移せば、まさに因声求義によって分析することとなり、それぞれが表す音価の表音機能を唯一の手掛かりとしながら、その音価による文脈に適當する語、すなわち意味を発見するのである。結果として同音異義語あるいは同音同義語になるかは、当面の考掘の過程には影響しない。したがって文献上は、同音借用・同源通用ともに仮借用法としての差はなく、さらにはそれが文脈上の意味を正しく表示するかぎりには本字と等価値であるともいえるのである。

四

因声求義を理論的に基礎づけ考掘学の合理性を支えるものが古音分部であった。何九盈は、「以声求義は、段・王にあつてはじめて実効的な運用がなされるようになったのであり、それはかれらによって科学的な古音分部の体系が確定されたから」と断じる。古音分部が因声求義の根拠となっていたとの明確な指摘である。

古音分部の解明については、顧炎武の古音研究が成立したことにより、従来経験的に処理されてきた声訓などの訓詁が、その導入によって初めて学問的な批判に耐えられる合理性を備えるようになり、清代考掘学を実質的に形成する契機となった。段玉裁は、『詩経』や『楚辞』を中心にした古代文献の押韻を実証的に分析し、さらには諧声文字の声符に着目して、その諧声系列と押韻とを総合的に研究して一七分部を析出した。王念孫も意識的に今音である『切韻』を排除し、特に『詩

経』『楚辞』などの押韻から二二分部を実証的に析出したのである。

ところで段玉裁は、諧声系列と押韻とを同列の資料にして古音分部を分析したが、諧声系列は、形声による漢字が造字された時点での極めて古い時代の音韻を反映し、押韻は時代のやや下がる『詩経』時代を背景としている。このため音韻の時間的変化という要素を考慮した場合、古音分部を分析する資料としては問題があった。そこで段玉裁は、合韻や古本音の概念を打ち立て調整しながら、それを根拠に各韻部間の遠近関係を構想した。さらに異平同入すなわち隣接する韻部で同じ入声を共有する関係が存在することを確認し、その入声を枢機にして相互に通仮しあえることを発見した。これは、孔広森の陰陽対転ほど音理性はないが、かれの合韻を支える理論的根拠となり、またこの合韻が各韻部間の遠近関係を推定するための指標ともなり、一七分部を体系的に把握するうえで積極的な役割を果たした。段玉裁は近隣関係にある韻部の間では、音の通転が可能であることを見出し、そこに聖賢の時代の古代漢語を解き明かすための鍵を感じ取ったのである。

王念孫は、『詩経』以下の古代韻文の押韻現象を中心に徹底かつ周到に古音分部を析出した自負からか、初めは異なる韻部間の通転である合韻を認めなかった。なぜなら古音分部の確定は、各韻部の差異を嚴格に画定するものであるから、合韻はそれと矛盾するので、いわば当然のことであった。しかしその後、陸宗達によれば、道光二年（二三）に丁履恒（道久）に与えた手紙の中で、東部を東・冬部二部に分ける孔広森の説を受け入れ、二二分部に修訂すると同時に、孔広森が主要母音を共通にする異分部間の転音を陰陽対転として理論化している⁹⁾ので、それに影響され合韻を認めるようになったと指摘している。この合韻の承認は、王念孫が『説文』の本字を苟守せず、仮借の音韻的背景にこの異部間の通用があることを積極的に認めて漢字の形体から超脱し、因声求義を一層充実させる大きな要因ともなったと思われる。ところで弟子の宋保の『諧声補逸』は、まだ二二分部の段階での王念

孫の古音分部を利用しながら『説文』の諧声文字の合韻について詳細に分析しているが、王念孫は、嘉慶一三年(一八〇八)頃からそれを読み手紙を与えて、決して合韻に反対せず、多くの助言を与えているのである。さらには「深喜同志之有人也」とその説を非常に高く評価し、しかも書中に採録される王念孫の考拠では、「支部と元部とが相互に出入することは、経伝中に確かに根拠とすべきものがある」と異部間の通仮を多くの事例を掲げて考証しているのである。この事実から、かなり以前にすでに王念孫が合韻を承認していたと考えられる。

ところで宋保は、その序文から窺われるかぎりでも合韻説を積極的に主張して因声求義の理論的背景を明かにしている。すなわち「一般に音が同じであれば、形体が違ってもその意味は近似している(凡声同、則雖形不同、而其義不甚相遠。思うに、仮借は音を主とするが、時代によって音韻は変化するので、自ら現在の音で古代の音の響きとすることはできない。そこで古人の文献を研究しなければ、分部間の遠近や同異を究明することができない。……世人は往々合韻の説を信じていないが、要するにいわゆる合韻は、晋・唐諸儒のいわゆる協音ではない。かつてこの問題を繰り返し研究してその説を深く信じることになった。古人の造字の始めを探求するに、ある韻部の字を別の韻部の声符で多く通用させているが、とりも直さず仮借・転注の起源なのである。……音近義同の字においては、その合韻の理論が理解されることがない。ああ、好學深思、心にその意を知るのでなければ、浅見寡聞の者に解らせることは容易ではない」と、実に明確に合韻を背景とする音近義同の現象について把握している。さらに「角部」では「大抵、合韻の理は、……全体的にその韻部の遠近関係を調べてみるに、近きものは直接通転し、遠いものは常に近い韻部から段階的に通転している。これが古音における諧声の原理であり、後世の音転は、この原理より生じたのである。……合韻の説は、造字の時点からすでに存在したのである」と、合韻の基本的な仕組みについて明確に解説する。またこれは王念孫らの合韻説を代弁したものと、またかえって王念

孫の考拠に影響を及ぼしたとも考えられよう。

以上、古音分部における合韻は、仮借分析に理論的根拠を与えるものであり、その音韻論的解釈が合理性を保つための根拠となるものであった。したがって仮借の分析は恣意的に行われるのではなく、古代音韻の体系のなかで分析され、ここに因声求義の合理性が保たれたのである。¹⁰⁰⁾

五

『尚書』堯典「光被四表」の光被に対する段・王の考拠には、それぞれの経書解釈の観点が鮮明に反映している。この問題に関する戴震と王鳴盛との確執も興味あるトピックではあるが、¹⁰¹⁾当面の関心は戴震の解釈に対し、段玉裁と王引之とがそれぞれの考拠の立場から行った補足修正の考拠にある。

戴震は、現行『尚書』の「光被四表」における「光」の意味は、「充」で、しかも本来その字形は「横」であるとした。それが光字になった事情を考証し、「横」が転写される過程で「桃」に誤られ、さらに「桃」字の木偏が脱落して「光」になったとする。したがって「横被四表」となっているテキストが存在するはずであると論じたのである。

段玉裁は、『古文尚書撰異』巻一で、師である戴震の考証を受けて、まずその説に対する補訂を行った。すなわち「光字は古文尚書、『横』字は今文尚書で、経今古文の違いである。『爾雅』『説文』に「桃、充也」とあることから、「充」義においては、「桃」が本字で、「横」はその仮借であるが、両字は漢代には通用していた。他方、古文系の「光」字は「桃」の木偏が脱落した譌字ではなく、やはり「桃」の仮借である。したがって鄭玄が「光耀」と訓じたのは、文脈を理解せずに仮借字である「光」字をその字義のまま釈したのであり、孔安国が「充」と訓じたのは、仮借字の「光」から本字「桃」を見透した上で釈したものである。よって古文・今文いずれも字体は違いますが、意味は同じで

ある。こう解釈するのである。

さらに段玉裁は考拠を深める。「桃」は、充滿と訓じられるが、それは「桃」字の本義ではなく、引伸義であると判断する。すなわち充滿するということは、必ず周囲を横木の枠で囲むことが必要で、その内側にあつて始めて充滿することが可能なのである。したがって『孟子』の「拡而充之」の「拡(擴)」は、この「桃」の意味で用いられた「横」の変異形であると解釈する。つまり「桃」字の形体に即した本義は周囲に巡らす横木である、と推定する。そこで段玉裁は、本来字形に即した本義を解説するはずの『説文』に「桃、充也」となっていることに疑義を示す。かれの見解では、漢代訓詁の形式では、本義を直接訓解せずに、引伸義や仮借義を説く場合(義隔而通之)は、「A猶B」の形式が常法であるとする。ただし『説文』は字義を解説するものであるから経書の注釈とは同列にはならないが、やはりその解説は「桃、猶充也」と想定して読むべきであると考えていたようである。

以上のように段玉裁は、経書のテキストとしては「光被四表」「横被四表」が通行していたが、これらはいずれも仮借表記で、その本字は「桃」であり、しかもその「充」義は、「桃」の本義ではなく引伸義であると周到に分析した。ここに段玉裁の考拠の核心がある。書記における、本字・本義を解明し、そこを起点として意味の引伸の過程そして経書の書記の実態を跡づける。この考拠の根柢には、ある表記の本字は必ず存在し、その本義から意味の引伸などの展開推移があり、この過程は必ず解明されなければならない対象である、とする観点がある。つまり経書解釈は、常に本字の確定から行われなければならない、という訓詁観念が支配しているのである。

次に、王引之は『経義述聞』巻三で、戴震の説に対し端的に、光・桃・横の三字は、古漢語においては同音で通用しあつた漢字であると主張し、決して伝写の過程で誤写したり、漢字の一部が脱落したりしたという理由によるのではないと批判した。すなわちこの三字はいずれも「充広」義をそのまま担い、表記としては等価値なのである。こ

れについては『漢書』以下の諸文献に「光被」が散見される実態を梃子に、「光」は「桃」字の譌字ではないと判断し、しかもこの「光」字がそのまま「充」と訓じられているので、「横」字と同等であると見做す。しかも段玉裁が戴震の考拠の末尾に附した案語で、李善引用の「東京賦」には「横被」とあるのに、現行『文選』で「広被」とあるのは「後人が妄りに改めたからだ」と規範的な立場から本文批判をしているのを意識してか、「広」も「光」と同音で充広の意味を持つから、これら光・桃・横・広はいずれも表記の語形は異なっても意味は同じ一語であるとする。さらに光被・横被・広被が古文獻に広範囲に確認できる状況のなかで、「漢字が異なっても、音・義が同じであるならば、この字体を正しいとし、あちらは誤りである」というような穿鑿は無用である(字異而声義同、無煩是此而非彼也)とみずからの視点を明確に表現した。つまり経書における書記現実とは、その字体の規範的な用法ではなく、すでに表音的用法が定着していると記述的に認識しているのである。それ以上に重要なことは、語としてのレベルから経書の書記を理解しているので、意味は音と不可分の関係にあると考え、表音の役割が適切で意味を正しく疎通させるのであれば、本字・仮借字は問題にしないのである。つまり王引之にとつて、光・桃・横・広これらは「充広」義の古漢語を表記する異なる語形にしか過ぎないのであり、その語であることが読み取れ、古代の表記慣習に外れないのであるならば、どの語形であろうが、文字表記としての機能は十全なのである。

ところで「桃」字に関して、本義は「枠にした横木」であり、それから引伸して「充」が導かれるという、段玉裁の解明は実に明晰で論理的である。しかしこの論理を支える観点について考えるならば、漢字の本義をそのまま意味の引伸の起点としている。つまり字と語との関係における逆立ちした認識が支配しているのである。桃・光・横・広が共通に表示する音声、すなわち語によつて指示される意味の広がりに対して、「枠にした横木」という意味を分節して「桃」という漢字

によって意味の限定をしたものが、まさに「桄」字の本義にしか過ぎないのである。つまり「桄にした横木」という字義は、語音により喚起される概念のカオス状の広がり、すなわち意味の多項目の内の一項にしか過ぎないのである。そしてその引伸義とされた「充」も同じくその語音が担う意味のうちの一項なのである。漢語の観点からすると、その本義—引伸義という関係はなく、同源という並立関係になるのである。この語の観点を推し進めて考えるならば、「充」義の語を表記する漢字として桄・光・横・広のいずれであろうと、語音を適切に表示するかぎり問題はないのである。したがって本字か仮借字かの議論は語の観点からは本質的ではなく、その表記が、ともかく文脈が要請する意味を表記している事実が、解釈者によって了解されるならば、それは表記手段としての役割を完全に果たしていることになるのである。いわば、ある語は、ひらがな・カタカナ・漢字・ローマ字のどれで書記されようが、その書記手段によって語の意味に変動はないのであるから、文脈の疎通を追求する場合、書記手段を顧慮する必要がないのと同じことなのである。

六

引き続き『尚書』大詁の「民献有十夫」の献—賢の考拠について、これまでの考察をさらに確認してみる。

段玉裁は『古文尚書撰異』巻一五で、「献」は古文尚書で、今文は「儀」に作るとした。これは古音において、元部（献）と歌部（儀）とが音韻的に関連が深いことから音転通仮したものである（元部与歌部関連音転）と分析する。その考拠として、まず『儀礼』大射儀注「献読為沙」、『周礼』司尊彝注「献読為儀」また「読為儀」とある、古注資料を挙げる。次に『説文』車部で、義声の「儀」字の別体として金偏献（獻）声の「鑑」字が存在すると、諧声系列の事例を指摘する。こうして十七分部における合韻の見地から、献—儀の異部間に仮借関係が成立す

ることを確認したのである。⁽³⁾ 意味については、『論語』八佾の「文献」の鄭玄注「献、猶賢也」を取り上げる。これは先に見た、直接その字義を示さない漢代訓詁の「A猶B」形式（義隔而通之曰猶）であるから、「献」には、その本義として「賢」の訓はないが、ただ「儀」字の仮借として用いられているのであるから、鄭玄はその本字「儀」の意味である「賢」を仮借義として担っていることを「猶」字を介在させつつ「献、猶賢也」と示したとする。これにたいして孔安国が、「万邦黎献」での注に「猶」字を用いず、いきなり「献、賢也」としたのは、漢代の訓詁法への無理解によるとした。ところで段玉裁は、この考拠の背景として、『説文』に、「献」の本義は宗廟の祭祀に奉る犬の犠牲であり、引伸して「薦進」の意になるが、「賢」とは連続しないと判断し、「儀」の本義は「度」であり、その引伸義として善があるので、「儀」の引伸義である善の、さらなる引伸として「賢」を想定したか、あるいは「広雅」「儀、賢也」を考慮していたと思われる。

以上のように段玉裁は、「献」が、「賢」の訓を獲得する経緯を、まず音韻上、「儀」とは合韻関係にあるので仮借字となりうることを明かにし、次いで本字である「儀」の引伸義である「賢」義が、「献」字の仮借義として取り込まれた、と跡づけたのである。

一方、王引之は『経義述聞』巻三で、次のような考拠を展開して献—儀が、同一語の異なる語形であることを論じる。まず大詁「民献有十夫」の伝が「献」を「賢」と訓じるが、この「民献」の異文として「民儀」があると指摘する。さらに「広雅」に「儀、賢也」、「爾雅」に「儀、善也」とあり、また酒誥の伝が「献」を「善」と訓じる、こうした一連の訓詁を根拠に、善と賢とは意味上交差するので、「儀」「献」の訓は、ともどもに賢であり善であるとした。

次に「古音では儀と献とは通じあう（古声儀与献通）」として、その音通についての文献上の証拠を、段玉裁の証例と重なるものもあるが、次のように列挙する。まず古注の音注として『周礼』司尊彝の鄭衆の注「読献為儀」を指摘する。諧声系列として郭璞の「爾雅音」が「儀」

音としている「轡」を『説文』では或体として献声に従う「轡」とする例と、「灑、議罪也」とある例を挙げる。さらに異文資料として『尚書』皋陶謨の「黎猷」に対する「黎儀」の例を挙げる。こうして古注・諧声系列・異文という三方面の文献資料から、音通を実証したのである。王念孫の弟子に当たる宋保の『諧声補逸』『門部』では「元と歌との両部は通用する」と古音分部の合韻のレベルからその通用を端的に指摘している。

王引之にとつて、献一儀は、古音が通用し、意味も、「儀」は、賢（『廣雅』・善（『爾雅』）、「猷」は、善（酒誥伝）・賢（大誥伝）というように重なる上に、『広雅疏証』で王念孫が「賢はまた善の大なるなり」と指摘することから、同一の意味と音、すなわち同一語を表記する異なる語形にしか過ぎず、仮借か本字かは問題とならないのである。つまり善ないし賢という概念で分節された古漢語のある語が、たまたま古音にあつては同じ音価の音節と認識された「儀」「猷」字によつて表記されたという理解なのである。したがつて経書上に現われた「儀」「猷」が、賢一善という文脈上の意味を担う語であると理解されれば、「経義を得た」として解釈は完結するのである。

七

ここでは段玉裁が本義を志向する理由と、その考拠との関わりを検討する。

『経韵楼集』巻二「聘礼辞曰非礼也敢对曰非礼也敢」で「經典では仮借字を用いることが多いが、その本字は多く『説文』に見られる。經典を研究する者は必ず『爾雅』や伝注において経義を把握し、それから必ず『説文』で字義を把握するのである。経や注を研究し終えてから、さらにそれを『説文』に参照すれば、仮借字であるか、本字であるかが了解できる。これが経書解釈の方法なのである（既読経注、復求之説文、則可知若為仮借字、若為本字。此治經之法也）」という。ここで段

玉裁は、まず経書では漢字の仮借用法が多いが、『説文』は本義が解説されることを指摘する。そして経書の文脈に置かれた使用義としての「経義」と漢字の形体に本来的に賦与された本義としての「字義」とを明確に区分したうえで、経義として確定するには、それが本義か仮借義・引伸義であるかを確認する必要があるとした。なぜなら経書解釈の原則は、その双方を完全に掌握するところにあると考えていたからである。

『説文解字注』『鬚』字項に「一般に字を解釈するには、必ずその本義を用いる。一般に経書を解釈するには、必ず文脈に因つて意味を追求するのは、字にあつて本義を用いているか、あるいは引伸・仮借を用いているか、決定しえないところがあるからである（凡説字、必用其本義。凡説經、必因文求義、則於字或取本義、或取引伸仮借、有不可得而必者矣）」と指摘する。経書における漢字の用法は本義としての用法のみならず引伸仮借が一般的であるが、どれが用いられているかを知るうえでの絶対的条件はない（有不可得而必者）。したがつてその解釈には「因文求義」というごとく、『説文』で解説される漢字の本義だけからは直接導くことができず、飽くまでも文脈の圧力によつてでなければ、経書の記述上の具体的な意味の決定ができないことを示し、経書解釈の本質を言い当てている。しかも引伸義・仮借義は、その漢字の本義を起点とする以外導き出せないのである。

弟子の江沅によつて段玉裁の『説文解字注』の作書の本意が明確に指摘される。「許慎の『説文解字』の本質は、実に文字の本義を明らかにすることであつた。そして先生はこの許慎の書の本質を説明されたが、それは許慎の書におけるそれぞれの字の本義を十分に跡づけ証明することにあつたのである（許書之要、在明文字之本義而已。先生發明許書之要、在善推許書每字之本義而已矣。……本義が明らかに成つて初めて余義が明らかになる。引伸の義もまた明らかに成つて初めて明らかなになるのである（本義明而後余義明。引伸之義亦明、段借之義亦明）」という。すなわちここに引伸義・仮借義が明かになるために

は、つまり経義として用いられる字義を理解するためには、本義が明らかとなることが起点になると考えている。なぜなら引伸・仮借であることの確認は本義との距離、つまり意義上の関連の度合いによることは明らかであるからである。したがって段玉裁にとって字形に依拠する本義への遡及は必然的である。

ところで段玉裁の本字依拠は、漢字の形体に拘束される因子であるが、それは、形声字の声符に固執することにも連続する。段玉裁が外孫龔自珍に『説文』について語った発言のなかに、「以声為義」という見解がある。しかしこれは声符を意味の表象と見做すもので、表面的な表現は因声求義に似るが、その内実にはかなりの懸隔がある。ともかくその説明の限りにあつては、あたかも宋代以来の「右文説」を継承しているかに思えるごとき声符中心の音義説なのである。すなわち「段先生が次のように言われた。歴史的にはまず声音があつてから文字が生まれた。したがって九千字の中、某を声符としているものは、必ず同じく某の義なのである。例えば、非声に従うものは必ず赤の義、番声に従うものは必ず白の義、于声に従うものは必ず大の義、酉声に従うものは必ず臭の義、力声に従うものは必ず文理の義、劦声に従うものは必ず和の義であり、全書で八九十件もある。これによつて上古の言語の実態を窺い知ることができる(此可以窺上古之語言¹⁰⁸)」という。ここで段玉裁は声符に意味指示の枢機が存していると考え、その音義を通じて「可以窺上古之語言」という目的が果たされることを期待していることは明かである。この部分はまさに乾嘉期考拠字が共有していた理念が、言語を通しての聖賢の時代への直接的なアプローチであったことと合致する見解であろう。胡奇光は「王念孫の『以音求義説』は語根を追求することを目標とするが、これは段玉裁が説く『以声為義は、上古の言語の実態を窺い知ることができる』と本質的に一致する¹⁰⁹」と、その古代研究という目標を言語を通して認識することで一体であつたと評価する。

しかし、以声為義には問題点がある。まず声符の字形が必ず一定の

意味を負荷しないということである。こうした漢字の形体を構成する声符に特定の意味を求める見解は、確かに帰納的にある程度音義関係の実情を言い当てるものではあるが、問題はそうした声符の形体が常に特定の意味を支持することを全面的に負っているとするわけにはいかないことである。反証は、番について「燔」に白の義はないというように、すぐに挙げられるのである。次に字と語との画定の問題がある。その混乱から、段玉裁は次のような倒立した論点を提示するのである。すなわち『説文解字注』「禮」字項で「一般的に農声の字はみな厚と訓じる。醴は、酒が濃厚なことである。濃は、露が多いことである。よつて禮は、衣が厚いさまであり、引伸して一般の多厚という語となつた」と指摘する。段玉裁の認識では、「禮」が、「衣の厚いさま」という本義をもち、他の農字を声符とする字も同じようであるために、引伸して多厚という一般的な意味を派生させることになつたとしているようである。ところが多厚こそが「農」音によつて表示される語の基本的な意味であり、たまたまそのうちの「衣の厚いさま」という意味を分節して「禮」を造字したという関係にあるのであるから、引伸というのは倒立した見解となる。語レベルの問題が、声符という形体に引きずられているのである。字形あるいは字義の研究は、語の研究が基礎とはなるが、結局はその特殊事例に過ぎないのである。漢字の字形の分析からは、その漢字が作成された時点で賦与された字義―本義は追求が可能ではあるが、引伸義・仮借義には、字形との有契性はないので不可能である。つまり漢字の形体は造字の本義を表示し負担するけれども、引伸義・仮借義は、字音が負荷する語としての意味なのである。さらに言えば、本義は漢字の字義ではあるが、語としての本義ではないのである。漢字の用法からいえば、その造字時の字形に固有した意味―本義でない用法は、その漢字の形体にとってはすべて借用と見做しうるものである。

段玉裁が字義分析の有力な装置とした引伸は、必ず本義を起点にせざるをえないため、本字の重視を導き、その考拠には、根本に漢字の

形体と不可分の本義さらに形声字の声符への深い依存という、字形への呪縛が不可避的に用意される。ところが引伸は皮肉にも字形に結びつく字義に関わるものではなく、語レベルの解釈となっていたのである。引伸は、段玉裁の考拠ないしは周到な『説文』研究を支えながら、一方では語義への水路を拓きつつも、他方では字形への桎梏として作用したのである。

八

王念孫・王引之の考拠のあり方を考えるうえで、見落とすことのできない王引之の証言がある。『高郵王氏遺書』に収録される「石臚府君行狀」の中に「かつて『説文』に掲載の漢字の字体を正統なものと見做してそれ以外の俗体を排除し、『六書正俗』なる書を著したが、まもなく漢字の表記の本質に対する認識が飛躍的に更新した結果、みづから今までの見解が浅薄であつたと悟り、したがってその草稿を廃棄したのである(嘗宗説文之字、而黜俗体、為六書正俗一書、既而識解益超、自謂所見猶淺、乃屏其稿而棄之)」とある。これは字体についてだけ言っているごとくであるが、その根柢には畢竟、漢字の本質はその形体になく、その字形が担っている語すなわち音・義にあるのであり、字形と語との間にはなんらの有契性もないとの認識がある。王念孫の「以声求義」、「不限形体」が、こうした観点と呼応している。王念孫はこの観点から、かれが段玉裁の『説文解字注』のために書いた序文の冒頭にさりげなく、文字は訓詁・音韻に比してあくまでも前提的存在にしか過ぎないとして「説文という書物は、文字によって声音・訓詁を兼ね示すのである」といい、続いて実質的な意義を「訓詁・声音が明らかとなつて小学が明らかとなり、小学が明らかとなつて経学が明らかとなる」と明言したのである。漢字の形体からの拘束を離れて、まさに声音訓詁という語としてのレベルから『説文』が解明されることによって、経書の記述は一層明白となるというのである。さらに王引之

の証言を裏付けるように「もし漢字の一点一画の正俗を分別したり、篆書や隸書の繁簡を明かにしたりすることに夢中になつて自信をもつたとしても、転注や仮借の通例に関して全然認識がないならば、文字は知つていても、声音・訓詁は知らないということである」と、漢字の字体の知識は、音韻訓詁という小学の本質と没交渉であるという。つまり音声訓詁こそが経学研究の基礎となりうるのである。

王念孫は、経書において仮借が一般的である状況から、漢字はすでに表音的に機能していると考え、字形を解釈の中心に据える本字尊重の非合理性を露わにした。連綿語についてではあるが、『広雅疏証』「都凡」項で「一般に仮借の字は、音声によつて意味を仮託するので、もともと固有の書記形式はなく、時代の隔たりのなかで色々な表記や読み方が現われるが、そのうちの一つを正しいとすることはできない(凡仮借之字、依声托事、本無定体、古今異説、未可執一)」という。ある語を表記するうえで仮借であるかぎりは、その固有の書記形式(定体)はなく、文献にはさまざまな表記の実例が現われ、しかもそのうちのどれが正しい語形であると規範的に判断する合理的理由はないとする。したがって王引之は『經義述聞』巻三で「この字を正しくあちらを誤りとするのは、ただの偏見にしか過ぎない(是此而非彼、祇一偏之見也)」。……そもそも古字通用の原理は、声音にあるのである。今の研究者はそれを声音に追求しないで、ただそれを形体に追求する。その説に誤りが多いのも固より当然であろう(夫古字通用、存乎声音。今之学者不求諸声、而但求諸形、固宜其説之多謬也)」と字形の克服を主張するのである。さらに「仮借の法は由来が古い。その本字は八割は求めうるが、二割は不可能である。必ず本字を追求して仮借字を改めるとなると、それはもはや校勘の聖の仕事であろう」といい、助字の表記に基本的には本字は存在しないことを射程に入れて、本字を究明することの無意味さを明かにしていた。

さらに王念孫は、声近義通の認識を踏まえて、意味的な関連があるのであれば、「名」すなわち音が音韻的な関連の範囲に留ることを分析

していた。すなわち『広雅疏証』巻六「八疾」項で「概して事物の道理が近似していると、その名(＝音声)は同じとなる(凡事理之相近、其名即相同)」という。つまりある対象や概念にたいしてはその命名が近似するということは、それらの語音が音韻的に緊密な音節どうしということであり、いわゆる同源語のネットワークを構成することになるのである。王念孫は、ある意味に関して、その周辺の意味との重なりや程度や関連する同義語との関係を分析し、語による概念の切り取り方は、さまざまなレベルで錯綜され重層化されつつ複雑に分節されている実態を明かにした。こうした認識に至ればもはや本字とか仮借字とかは、言語を書記する手段として通行性の度合の問題にしか過ぎないのである。例えば「苗」(明母宵韻)は、その字義は「稲のなえ」であるが、その音が担う語としての意味には「末」義がある。王念孫は『広雅』に「苗裔、末也」と「苗」に「末」義があるのにたいして、まず「稲が始めて生えたのを苗という」と字義を説いたうえで、「本(＝根)にたいして言えば、なえは末となる」と「末」義との近似性を解釈し、さらに同じく『広雅』に「杪、末也」とある、木の細い枝を字義とする「杪」(明母宵韻)と音義が共通すると指摘する。王念孫は、「末」――「芽ぶいた苗」――「細い枝」という共通の意味の因子を抽出しうる対象が、同音の「名」(苗・杪)により表現されており、これら同源語のネットワークのなかでまたまた細い枝を分節してそれを文字化したものが「杪」で、稲の生え出したばかりの苗として特定し文字化したものが「苗」であり、「末」の意味は、その特定の語形を持たずに苗・杪で賄われている、という認識なのである。ところで「末」こそがその音Ⅱ語として担う本来的な意味であって、その語義の広がりの中から木の枝先という個別の意味を分節したものが「杪」であるにもかかわらず、段玉裁は『説文解字注』で「杪」の字義は細い枝先であり、「これを引伸して、一般的に末の義にはすべて杪という」といい、「杪」の字義が起点となり、そこから引伸して、「末」の意味を担うようになつたと倒立した説明をする。字の本義は、語義の内の一項にしか過ぎな

いのである。しかしながら段玉裁は、字義の本義と引伸義との関係において、引伸義も字義を起点として字義から転移引伸したものと倒立した認識に支配されている。語義は、漢字の本義とは根本的に区別されなければならない。なぜなら字と語との明確な認識が確立されていないため、本来語のレベルで運用されている古文獻や経書の記述にあつて常に字義の呪縛を克服できず、文脈の正しい理解にとつてはまったく無用である本字穿鑿の煩わしさがあるからである。王念孫らが経書解釈において克服しようとしたものがまさにこの点であつた。

従来、段玉裁と王念孫との間の考拠の差異を論じるときに主として指摘されるものは、段玉裁は『説文』を、王念孫は『広雅』を対象としたという、その対象の性質に従つてこれらの考拠の姿勢がおのずから異なることになつたという解釈である。確かにこれは見易い。しかし、王念孫に関していうならば、『説文』に対する詳細な研究があつたと見るべき形跡がある。それは『説文』の詳細な校勘に関する断巻があることである。しかもその内容は説文の体例を完全に了解した上での非常に透徹した見識からのものである。さらに巻末に附された蔣斧の跋文に拠つて言えば、段玉裁は、これを見た様子はないようであるが、王念孫からの聞き取りを『説文解字注』に採用している。また、王念孫に説文注の序文を依頼する際の書簡にも、王念孫自身からの段玉裁の独自の研究書であるとの表明がなければ、王念孫の説を多く襲つたという誤った評判が立つことが気懸りであるというようなことを漏らしている。こうした危惧の背景には、いかに王念孫が『説文』に深く通曉していたか、その当時の評価が如実に窺われるのであり、決して考拠対象に左右されたということでは説明し切つたことにはならず、改めてそれぞれの観点というものが問題となる。

単純化して言うことは多くの要素を捨象することとなり危険なことではあるが、かれらは因声求義を経書解釈の手続きとして同じ歩調を取っていたが、段玉裁の場合は、漢字の本義を志向し、また声符その

ものに音義関係の根拠を求めるなど形体に重要な意義を見出し、その経書解釈には常に本義の影が感じられる。これに対して王念孫・引之父子は、漢字の形体の拘束から脱して、単なる漢語を書記する手段との認識に達しており、その経書解釈は語義レベルのものとなっていたのであった。

《注》

- (1) 『国故論衡』上巻「小学略説」、「章氏叢書」中文出版社、一九七〇、四三頁に「文理密察、王氏為優。然不推說文本字、是其瑕適」と批判する。ちなみに章炳麟は「小学答問」第二条で、「祝」が断義を持つについては、「殊」字の仮借によるものとする。これに対して「声韻通例」、「黄侃論学雜著」台湾中華書局、民五六、一三頁に本字を追求しない理由を二点挙げ、そのみならず「寧闕而不説、斯其謹也」とまで言う。
- (2) かれらの因声求義については、毛玉玲「段玉裁の以声説義」、「昆明師範学院学報」一九八三、第一期、王小華「王氏父子「因声求義」述評」、「華南師範大学学報」一九八六、第四期などの論文があり参考となる。訓詁学における因声求義については、陸宗達・王寧「因声求義論」、「遼寧師範学院学報」一九八六、第六期があり、後に兩人共著の「訓詁方法論」中国社会科学出版社、一九八三、に収録される。
- (3) ソシニールも特定の言語体系という、歴史的社会的に限定された言語内にあつては、ラングとして言語が制度化し個人の自由意志ではないかんとすることのできない音と意味との結合体として人々に強制的に必然的に課されてくることを認めている。この点に関しては、丸山圭三郎「ソシニールの思想」岩波書店、一九八二、三〇一―三頁で明かにされた。この部分だけ見れば、バンヴェニストが「言語記号の特質」でソシニールの恣意概念を批判してみずから主張したものと同一となる。王力も「中国語言学史」山西人民出版社、一九八二、五三頁で「事物得名之始、固然是任意的、但到了一个詞演變為幾個詞的時候、就不再是任意的、而是在語言上發生關係的了」と同じ見解を表明している。
- (4) 「略論清儒的語言研究」、「龍虫並雕齋文集」第三冊、中華書局、一九八三、三三頁。また声近義通が単なる可能性だけである件に関しては、黄侃「文字声韻訓詁筆記」上海古籍出版社、一九八三、咒頁にも「凡同音者必

同義乎。按同音者雖有同義、而不可以言凡」という。後世の声近義通の乱用の遠因は王念孫らにあるとする指摘は、周大璞「訓詁学要略」湖北人民出版社、一九八四、三七頁にもある。

- (5) 『国故論衡』上巻「語言起源説」、「章氏叢書」中文出版社、一九七〇、四六頁に「語言者、不馮虚起、呼馬而馬、呼牛而牛、此必非恣意妄称也。……故物名必有由起」という。

- (6) 「言語記号の特質」、「一般言語学の諸問題」みすず書房、一九八三、七頁。
- (7) 王引之はまた『経義述聞』巻三二「经文假借」で「至於經典古字、……而古本則不用本字、而用同声之字。学者改本字讀之、則怡然理順。以借字解之、則以文害辞」という。
- (8) 『中国古代語言学史』河南人民出版社、一九八五、二七頁。
- (9) 「王石臞先生韵譜合韵譜遺稿跋」、「国学季刊」三卷一、一九三三、一六六頁。

- (10) 音転について古音分部に依拠した韻部からのみの合韻に拠る解釈は、錢大昕から批判され、後世からも厳しく指弾された。戴震の転語や錢大昕の声紐の視点は、一部王念孫の「釈大」に見られ、段玉裁もまた双声による仮借を認め、『説文解字注』「酒」字項に「洒灑本殊義而双声、故相假借。凡假借多疊韵或双声也」というが、基本的には古音分部が中心であった。王国維は「爾雅草木虫魚鳥獸釈例序」で双声こそが音転の本質的な役割を演じたと指摘する。錢玄同も「文字学音篇」で「古今語言之転変、由于双声者多、由于疊韻者少。不同韵之字、以同紐之故而得通転者往往有之」(『錢玄同音学論著選輯』山西人民出版社、一九八二)という。しかし傅東華は「漢語声紐變転之定律」で「凡仮借・転注・諧声、方其始也、必二字之声紐与韻部皆大体相同、此文字学上万無可易之原則也」(龍門書店、一九八二)と指摘して、仮借・音転は、声紐・韻部がともどもに関係し、その分析にはその双方を確認する必要があるとした。最近全八巻が完成した『漢語大字典』の通仮字表に対して伍崇文「通仮字和《通仮字表稿》」(『辞典研究』一九九一、第一期)なる研究が出たが、その通仮字の統計的分析によると、双声疊韻が三六・〇%、疊韻が三三・六%で、双声が二八・六%、音韻関係にないものが五%と示された。古音分部に偏して通仮・音転を論じた乾嘉期の考拠学をあなたがち否定するまでもない結果と見られよう。

- (11) 近藤光男「戴震の経字」、『清朝考証字の研究』研文出版社、一九七、が詳細に論及している。戴震の説は、「与王内翰鳳喈書」、「戴震集」上海人民出版社、一九〇、三二頁に見える。
- (12) 『説文解字注』「讎」字項に「凡漢人作注云猶者、皆義隔而通之。……凡鄭君高誘等每言猶者皆同此。許造説文、不比注経伝、故径説字義不言猶」と凡例化している。
- (13) 『六書音均表』表四の「第十七部」古合韵で、元部と歌部との合韻について記録する。ところで現在の古音研究のレベルでは元部・歌部は主要母音を同じくする陰陽の対転関係であるとしている。また儀一猷それぞれの声紐は疑母一曉母で、ともに喉音で古双声であるので、これは双声疊韻の近音であると見做される。
- (14) 王引之は、「讎」と「議」とが声符を互換しうるものと考えているのかもしれない。しかし王念孫は『説書雜志』漢書十三で、子の引之の説を全面的に採用するが、この証例は削っている。
- (15) 『説文解字注後叙』、『説文解字注』上海古籍出版社、一九八、七六頁。段玉裁は「済盈不濡軌伝曰由軌以下曰軌」、「経韵楼集」卷一「段玉裁遺書」大化書局、民六、八五頁に「凡字有本義焉、有引申段借之余義焉」といつて余義は引伸義・仮借義であるとした。
- (16) 『最録段先生定本許氏説文』、『龔自珍全集』中華書局香港分局、一九四、三九頁。最初の「非声に従うもの」の「非」字は「段」の誤りであろう。段玉裁は「非声」についてはこうした指摘をしておらず、「鰕」字項に「凡段声、如瑕鰕鰕等、皆有赤色」とあることから明かであろう。
- (17) 中国文化史叢書『中国小学史』上海人民出版社、一九七、元二頁。
- (18) 王力『古代漢語』上冊第一分冊、中華書局、一九四、八三頁に「文字字家憑什麼弁別本義呢？主要是憑字形。分析字形、能說明字的本義、從而有助於了解詞的本義」と字の本義と語の本義との区別を明確に示している。また張世祿「漢語詞源学的評述及其他」、「張世祿語言学論文集」学林出版社、一九四、四一三頁には「字源」研究の結果、畢竟不能用来充当真正的「詞源」的实例、這兩者之間、必須加以區別、不能用来相互替代」と字源と語源との混同を警戒している。
- (19) 「工部尚書高郵王文簡公墓表銘」、「龔自珍全集」、四八頁。
- (20) この字と語との区分に関しては、張世祿「詞義和字義」、「張世祿語言学論文集」が参考となる。
- (21) 胡奇光『中国小学史』二六頁。また孫雍長「合則双美 離則兩傷——論段・王訓詁学説之互補關係」、復印報刊資料「語言文字学」一九八四、四頁にも指摘がある。この論文は、段玉裁の引伸の立場と王念孫の義通の立場と、その学説の差異を認めつつもそれらを総合的に利用して今日的な文献研究に役立てようとの趣旨を展開する。その論は大いに参考となるが、行論上から明かにしたごとく、段・王の学説の差異は補完関係と見るべき性質のものではないように思われる。
- (22) 桂馥が輯録した「王懷祖先生説文解字校勘記殘稿」、叢書集成統編第七〇冊、新文豐出版公司、民六、によつて窺うことができる。阮元撰「王石臞先生墓誌銘」に「爾雅説文皆有撰述矣」とある。
- (23) 「与王懷祖書三」、劉盼遂輯「経韵楼集補編」、「段玉裁遺書」、二二二頁。